

審査の結果の要旨

氏名 鈴木悠太

本論文は、アメリカにおける教師の「専門家共同体」の概念の展開を「ランド・変革の担い手研究」(1971-1977年)を起点とする学校改革研究の系譜の一つとして描出し、教師の専門家としての学習の基盤となる同僚性の概念構築における葛藤の過程を探究している。

本論文は、1970年代から1980年代における「ランド・変革の担い手研究」を対象とした第1部、1980年代から1990年代における「同僚性」概念を分析した第2部、1990年代から2000年代における教師の「専門家共同体」の展開を叙述した第3部で構成されている。

第1部の第1章は、ミルブリィ・マクロフリンを中心とする「ランド・変革の担い手研究」を分析し、「最善の実践例」の「忠実な実施」を追求する政策決定者に再考を迫った「相互適応」モデルを評価し、「専門家の学習」と「専門家共同体」の概念が生成し発展した過程を詳述している。続く第2章は、リチャード・エルモアとマクロフリンによる同研究所の共同レポート『愚直な仕事』(1988年)を詳細に検討し、「政策」「行政」「実践(教師)」の中で「教師」が学校改革の主要なエージェントに定位された意義を考察している。

第2部は、1980年代から1990年代において学校改革研究の中心概念となった「同僚性」の成立と展開を検討している。第3章では、ジュディス・リトルが学校の成功要因の分析によって提示した「同僚性」概念の特質が明確化され、「ランド・変革の担い手研究」の延長線上でこの概念が提示されたことが実証される。そしてアンディ・ハーグリーブズの「作られた同僚性」への批判やマイケル・ヒューバーマンの「自立的職人モデル」による批判が提示され、リトル自身もこの概念の積極的使用を断念した経緯が分析されている。続く第4章は、オーストラリアの学会誌上におけるマイケル・フィールドイングの「ラディカルな同僚性」に対するリトルとハーグリーブズによる批判が紹介され、「同僚性」への理論的関心が「専門家共同体」へと移行する過程が示されている。

第3部のスタンフォード大学「中等学校の教職の文脈に関する研究センター」におけるマクロフリンの「専門家共同体」研究の進展が叙述され、「革新と学習の規範」「省察・フィードバック・問題解決の能力」「民主的な意思決定」「有効な授業実践の開発」による革新的授業実践の創造が「専門家共同体」の中核となる理論の形成過程が描かれる。続く第6章では、その後のリトルによる「専門家のディスコース」研究を中心に、多様な学校改革研究者による教師のディスコース共同体の研究の進展に言及している。さらに第7章では学校改革研究の「第二世代」の研究の多様性が開示されている。

このように、本論文は「専門家共同体」の概念の形成と発展の系譜を精緻にたどりながら、教師が専門家としての学習共同体とその自律性を構築することの教育学的な意義と、その複雑で多様な研究の展開を学校改革研究の一つの系譜として描き出すことに成功している。さらに本論文で解明されている同僚性と教師の成長に関する専門的知見は、日本の学校改革と現職研修の改革に多数の貴重な示唆を含んでいる。

よって、本論文は、博士(教育学)の学位の水準に十分に達しているものと評価された。